

テゼ共同体のブラザー・ロジェの『心の静思のなかの祈り』*1)

— ポール・ロワイヤル修道院に関連して —

森 川 甫**

ブラザー・ロジェ

『心の静思のなかで祈る』

100の祈り

森川 甫 試訳

祈りこそなさねばならない務め

個人の祈りは、いつも素朴なものです。祈るには多くの言葉が必要だと思いませんか。いいえ。時に、まずくとも、いくつかの言葉で、私たちの恐れや期待を神様に委ねるには、十分なのです。

私たちを聖霊にゆだねて、不安から信頼への道を見出しに行きましょう。

その祈りのなかで、私たちが決して一人でないことを予感することができるのです。聖霊は、私たちのうちで神との交わりを支えます。それは一瞬ではなく、終わることのない生命に至るまでです。

そうです。聖霊は、私たちのうちに火をともします。その火は明るく輝き、私たちの魂のうちに神への思いを覚まさせます。そして、神へのこの素朴な思いは、すでに祈りなのです。

祈りは世間の営みにかかわることから離れてはおりません。逆に、祈ることほど、なさなければならぬものはないのです。全く素朴で、そして、全く謙遜な祈りで生きるならば、ますますその生活によって、愛し、そして、愛を表明するように導かれるのです。

聖霊よ、

反対があるところに平和をおき、そして、私た

ちの生活によって、神の憐れみの息吹が感じられるようにしてください。

そうです。私たちの生活によって、愛し、そして、それを言うことができるようにしてください。

私たちの平和であるイエスよ、

あなたの福音によって、私たちが全く素朴で、そして、全く謙遜な存在であるように、あなたは、呼び掛けられます。

あなたが私たちの心のうちに絶えずおられるゆえに、あなたへの限りない感謝が、私たちのうちに大きくなるように、あなたはしてくださいませ。

憐れみの神よ、

あなたの臨在が私たちに感じられない時でも、あなたはそこにおられます。

あなたの臨在は目には見えませんが、あなたの聖霊は常に私たちのうちにおられます。

宇宙を満たす聖霊よ、

あなたは私たち人間の弱い力の及ぶところに心の善意、救し、憐れみという福音の貴い価値ある教えをおいてくださいます。

人類すべての神よ、

私たちがあなたの愛を受け入れたいとただ求める時、私たちの魂の奥底で少しずつ火の炎が燃えます。その炎は弱々しいですが、絶えず燃えています。

*キーワード：ブラザー・ロジェ、ポール・ロワイヤル修道院、祈り

**関西学院大学名誉教授

1) Frère Roger, Roger Schulz. テゼ共同体の指導者であるので、敬意を表し、本論では、「ロジェ師」を用いる。修道院長 prieur も用いる。2005年8月没。

私たちの希望、イエスよ、

あなたのうちに、私たちは慰めを見出します。その慰めは私たちの生活を潤し、そして、私たちは祈りのうちに、すべてをあなたに委ね、すべてをあなたに託すことを知っています。

聖霊よ、

私たちすべてのために、あなたは呼びかけられます。

それ故、あなたが私たち一人ひとりに期待されていることを見出すように、私たちの心を整えに来てください。

憐れみの神よ、

純真な人々の理解しがたい苦悩に戸惑って、私たちは試練を経験している人々のために祈ります。

人間家族すべてにとって、必須な平和を求める人々の心に靈感を満たしてください。

聖霊よ、

あなたにあって、この驚くべき真実を見出すことが、提供されています。

神は人間の苦悩も、悲嘆も望まれない。神は私たちのうちに恐怖も、不安もつくらない。神はただ私たちを愛するのみなのです。

慰めの神よ、

あなたは私たちが担っているものを、あらゆる時に、不安から信頼へ、闇から光に前進するように、担ってくださいます。

私たちの平和の主、イエスよ、

私たちの夜も、昼も、暗がりでも、白昼でも、あなたは私たちの戸を叩き、あなたは私たちの返事を待って下さいます。

臨在の神秘、聖霊よ、

あなたは私たちをあなたの平和で包みます。ご臨在は私たちの内奥に触れにやって来られます。私たちに命の息吹をもたらします。

私たちを愛する神よ、

私たちの祈りがどんなに貧しくとも、私たちは信頼を持ってあなたを求めます。そして、あなたの愛は私たちのためらいを、また、疑いさえ通って道を造ります。

私たちの平和の主、イエスよ

生涯、あなたに従うことを呼びかけるのはあなたです。それ故、目立たない信念でもって、あなたをさらに、そして、常に、受け入れるように、私たちが招いて下さいます。

聖霊よ、

私たちの言葉があなたとの交わりの期待を殆ど表せない時でも、あなたの見えないご臨在が私たち一人ひとりに住み、喜びが私たちに提供されております。

憐れみの神よ、

祈りのうちにあなたを待つことができ、私たちの生活のそれぞれの上に注がれた愛の眼差しを受け入れることができるようにしてください。

私たちの心の喜び、イエスよ、

あなたは私たちのうちに聖霊を広げてくださいます。

聖霊は私たちの内奥に信頼をよみがえらせます。

イエスによって、神を求める素朴な願いが私たちの魂に命を与えることを私たちは知っています。

慰めてくださる聖霊よ、

あなたから私たちを離れさせる不安の上に、息を吹きに来て下さい。

憐れみの神よ、

福音によって、私たちは、あなたが私たちの内的な孤独まで愛して下さることを垣間見ることができます。

心から信頼して、あなたに自らを委ねる人は幸いです。

私たちの信頼、イエスよ、

私たちのうちに、あなたは明かりを点しにやって来られます。その明かりがどんなに弱くとも、私たちの心のなかで神への思いを支えるのに十分なのです。

聖霊よ、

私たちのうちに絶えず臨在して、私たちを導き、あなたは私たちに愛による命を与えてくださいます。

そして、時にあなたを忘れる時でも、あなたは私たちの上に喜びを広げてくださいます。

憐れみ深い主イエスよ、

試練に打ちひしがれても、あなたは誰をも恐れさせず、あなたは赦してくださいました。私たちもまた、全く素朴な心に留まり、赦すことができるように望みます。

〈他の誰の所に私たちは行くことができようか？〉

歴史を遠く遡るならば、大勢の人々は、祈りにおいて、神が光を、その光のなかに命をもたらして下さることを知りました。

キリスト以前にすでに、ある信仰者は祈りました。「主よ、夜、私はあなたを求めました。私の最も内奥で私の精神はあなたを探しております。」と。

神との交わりの願いは、太古から人間の心におかれている。この交わりの神秘は、最も親密な所、存在の深奥に達しています。

それ故、私たちはキリストに言うことができます。「私たちは、あなた以外の誰の所に行くことができるでしょうか？ あなたは私たちの魂に命を与える言葉をお持ちなのです。」と。

憐れみのキリストであるあなた、

あなたは私たちの賜物と弱さを持ったままで、私たちを受け入れて下さいます。

そして、聖霊によってあなたは解き放ち、赦し、愛によって私たちに命を与えるまで私たちを導いてくださる。

愛そのものである神よ、

私たちはあなたの声を聴きたいのです。私たちの内奥であなたの呼びかけ、「あなたの魂が生きるように、前進しなさい。」が響く時。

聖霊よ、慰めの霊よ、

全く素朴な私たちの祈りを受け入れて下さい。私たちはすべてをあなたに委ね、あなたが魂のうちに実現してくださっていることを喜び求めています。

キリストであるイエスよ、

素朴な祈りのなかで、弛みなく神との交わりを求める毅然とした心を私たちに与えてください。

憐れみの神よ、

福音は、このよい知らせを教えてください。「誰も、そうです、誰もあなたの愛からも、あなたの赦しからも追い出されない。」

聖霊よ、内なる光よ、

私たちは決して闇ではなく、常にあなたから来る光を求めているのです。

イエスよ、私たちの喜びよ、

あなたを追い求めるよう私たちに呼びかけられます、そして、あなたの福音書は私たちの心や人生を変えうることを私たちは知っています。

憐れみの神よ、

全地であなたの証人であることを求めている多くの女性の、男性の、青年に代わって、あなたを賛美します。

聖霊よ、慰めの霊よ、

み前にあり、平穏な沈黙の時、それはすでに、祈りなのです。

あなたは私たちのすべてをご存知なので、ただのため息でさえ、時には祈りでありうるのです。

イエスよ、あらゆる命の救い主、

私たちの心に上る明けの明星のように、あなたは私たちの疑いやためらいにまで光を照らしてく

だします。

どの人間存在をも愛される神よ、

私たちは毎日、静思のなかで、また、愛のなかで、あなたと交わりをもって生きることを望んでおります。

静思の人吹きの中で、宇宙を満たす聖霊よ、

あなたは私たち一人一人に言われます。「何も恐れることはない。あなたの心のなかには神が知られる。求めなさい。そうすれば、見出すでしょう。」

私たちの心の平和、イエスよ、

あなたの福音はあなたの愛の充満へ私たちの眼を開いてくれます。

あなたの福音は許しであり、心のなかの光です。

あらゆる愛の神よ、

信頼をもってあなたを求めつつ、私たちの心の矛盾でさえ、あなたの聖霊の眼差しを私たちは期待しております。

聖霊よ、

あなたは私たちに不安を与えることを望まないで、私たちが平和で包んでくださる。平和は私たちにひとりの人として神の今日を毎日生きるよう備えてくれる。

キリストであるイエスよ、

あなたはこの地上に人々を責めるために来られたのではなく、聖霊によって私たちが神との交わりに生きるために来られたのです。

平和の神よ、

たとえ私たちは弱くとも、あなたが私たちが愛してくださるように、私たちが愛するよう導いてくださるあなたの道に従うことを望みます。

聖霊よ、臨在の神秘よ、

私たち一人ひとりにあなたは告げられる。「何故あなたは悩むのか。唯一つのことのみが必

要なのだ。神があなたを愛していることを理解し、常にあなたを赦してくださることを聴く心。」

私たちの希望である神よ、

たとえ弱く、欠けている者であっても、つねにあなたが神への道を明らかに示して下ることを理解したい。

愛の神よ、

聖霊によって、あなたはつねに臨在しておられます。あなたの臨在は目には見えないけれども、たとえ私たちが意識していない時でも、あなたは私たちの魂の中心に住んでおられます。

聖霊よ、神の愛の息吹よ、

私たちの祈りが取るに足りないものであっても、福音によってあなたは私たちの心の静思にまで降って祈りを導いて下さることを私たちは知っています。

観想の眼差し

観想の期待の中で、神の御前にあることは、私たちの人間的尺度を越えることではありません。

そのような祈りの中で、信仰の表現しがたいものの幕が上がり、そして、言葉に言い尽くせぬことが神崇拝に到達するのです。

熱心さが失せ、そして、感じられる余韻が消える時でも、神はおられます。私たちは決して神の憐れみを奪われてはいないのです。

神が私たちが遠ざかっておられるのではなく、私たちが時たま不在なのです。

瞑想の眼差しは、福音の徴を最も単純な出来事の中に知覚します。

その眼差しは、キリストの臨在を人間の最も捨てられた者の中でさえ見分けます。

その眼差しは宇宙の中に創造の輝かしい美しさを発見するのです。

聖霊よ、

あなたは常にあなたの平和を私たちに着せてくださいます。

そして、福音から汲まれた喜びが私たちのうち

に住む時、その喜びは命の息吹を私たちにもたらしめるのです。

私たちを愛する神よ、

あなたの赦しを瞑想することは、あなたに頼るへりくだった心の中で善意の輝きとなります。

私たちの心の平和であるイエスよ、

あなたに従うように私たち一人ひとりに呼びかけてくださいます。

私たちはキリストであるあなた以外の誰に従うことができるのでしょうか？

あなたは私たちの魂に命を与える言葉をお持ちです。

聖霊が讃えられますように！

聖霊は私たちの存在の内奥におられ、そして、私たちの生の苦痛を臨在の火で焼き尽くしてください。

平和の神よ、

あなたは福音の喜びを私たちのうちに托することを求められます。その喜びはすぐ近くにあり、あなたの信頼の眼差しによって私たちの生命の上で生き生きしております。

私たちの希望であるイエス・キリストよ、

福音は暗闇の時さえ、神は私たちが幸福であることをお望みであることを私たちに知覚させて下さいます。

そして、私たちの心の平和が、私たちの周りの人々に、美しい人生をもたらすことができるのです。

宇宙を満たす神よ、

あなたは私たち一人一人のうちに神との交わりの生活を増し加えられます。

そして、そこに心の善意と他の人々のための自己忘却が開花するのです。

憐れみの神よ、

あなたは思いがけない光で私たちの魂を照らししてください。

その時、私たちは私たちのうちに暗闇が住むならば、その中にあなたの臨在の神秘がその闇のそれぞれにあることを私たちは発見するのです。

キリストである神よ、

私たちはあなたの眼差しを求めます。その眼差しは私たちの心の苦痛を消しにやってきます。

そして、あなたは私たちに言われます。

「心を惑わしてはならない。目には見えなくても、私は常にあなたたちとともにいる。」

聖霊よ、

あなたは福音のこの真実に私たちを開いてくださいます。

つまり、憐れみの精神を失わないならば、何物も重大ではないほど赦しを与えてくれる愛に。

聖霊による慰めの神よ、

あなたは私たちの心を変えにやってこられます。

私たちの試練そのものの中で、あなたはあなたとの交わりを大きくされます。

私たちの心の喜び、イエスよ、

あなたの赦しとあなたの憐れみに生きる者に、あなたは確信の中の確信を予感させてくださいます。

即ち、憐れみのあるところに、神がおられることを。

それぞれの人間を愛してくださる神よ、

あなたの愛が何よりもあなたの赦しであることを私たちが理解する時、

私たちの心は安らぎを得、心が変化することさえあります。

キリストであるイエスよ、

私たち一人一人に対して、あなたは呼びかけ、そして、言われます。

「私に従ってきなさい。そうすれば、あなたは心の安らぎを得るであろう。」

聖霊、慰めの霊よ、

あなたによって私たちは決して孤独でないことを見出し、そして、あなたは私たちのうちに神との絶えざる交わりを保ってください。

永遠そのものである神よ、

私たちは祈りの静思の中であなたを求め、そして、福音において見出される希望に生きたいのです。

キリストであるイエスよ、

あなたの福音によって、まず重要なのはあなたの憐れみであることを理解します。

それ故、どうか私たちに慈愛の心を与えてください。

聖霊よ、

私たちの心が躊躇を覚える時、あなたは私たち一人一人に一つの道を開いてくださいます。

それは、私たちの生命全体を神に返すことです。

優しさの神よ、

あなたのうちに私たちは私たちの存在の意味を見出します。

それは、私たちの命をキリストと福音に委ねることです。

キリストであるイエスよ、

福音において、私たちが傷つけたものに対して、あなたは遅れをとらないようにと私たちに言われます。

そして、あなたの赦しは私たちの生活の中で奇跡となるのです。

私たちが愛する神よ、

あなたの泉へ、私たちは喜びの日も、苦しみの日も行きたいのです。

そうすれば、聖霊によってあなたは私たちの心に語りかけてくださいます。

聖霊よ、

あなたは一瞬ではなく、いつまでも、終わることのない生命にまで、私たち一人一人と交わって

くださいます。

神に委ねる

私たちの祈りが貧しく、言葉がまずくとも中断しないようにしましょう。

私たちの魂の深い願いは、神との交わりを実現するのではないのでしょうか。

西暦3世紀、アフリカの信者、その名はアウグスチヌスは書いています。「神を求める願いはすでに一つの祈りである。もしも絶えず祈りたいならば、願うことを決して止めてはいけない。…」と。

心の大きな素直さが観想的な祈りを支えます。それは自らを神に委ね、神に向かうようにしてくれます。

この委ねる道は、次のような簡潔な歌を何度も何度も繰り返すことによって支えられるのです。「私の魂は神によってのみ憩います。」と。私たちが働いている時でも休んでいる時でも、このような歌は心の中で求め続けるのです。

このような交わりの生活の中で、目には見えない神は、人間の言葉に翻訳できる言語の用い方を必ずしも求められないのです。神はとりわけ静かな直観によって私たちにかたられるのです。

祈りの中のこの静思は無であるように思われます。しかし、この静思の中で、聖霊が私たちが神からの喜びを受け入れるようにしてくれるのです。この喜びは私たちの魂の奥底に触れるようになるのです。

キリストであるイエス・キリストよ、

あらゆる命の救い主。

あなたは試練を受けている者とともに苦しみ、そして、あなたに重荷を委ねる者を絶えず受け入れて下さいます。

神の愛の息吹よ、

聖霊よ、

私たちは、時々、あなたがすぐ近くにおられるのを見出して驚きます。

平和の神よ、

あなたは私たち一人一人を愛し、探してくださいます。

あなたは限りない優しさと深い憐みをもって人間一人一人を見ておられます。

キリスト・イエスよ、

福音書のなかで、「あなたがたの心が乱れないように平和を与える。」と言われるとき、私たちはあなたのみ言葉によって生きます。

聖霊よ、

私たちがいつもあなたの方に向かうようにしてください。

あなたが私たちのうちに住み、
あなたが私たちのうちで祈り、
あなたが私たちを愛して下さることを、
非常にしばしば、私たちは忘れております。
私たちの中でのあなたの臨在は
信頼であり、絶えることのない救しなのです。

憐れみの神よ、

使徒たちと聖母マリアに続いて、私たちが
愛と信頼のうちに
あなたに委ねるように備えてくださいます。

私たちの心の希望、イエスよ、

私たちのなかに絶えず住み、
福音によって、
私たち一人一人に語りかけられます。
「恐れるな、私はあなたと共にいる。」

聖霊よ、

臨在の神秘よ。
あなたは絶えず私たちに来られます。
あなたは私たちの魂の奥底に住み、
あなたとの交わりの期待を
私たちのうちに呼び覚まして下さいます。

愛そのものである神よ、

あなたは私たち一人ひとりに
福音の喜びを与えてくださいます。
私たちが試練にあう時、
道が開かれ、

その道は私たちをあなたに委ねるのです。

キリストであるあなた、

あなたは私たちの奥底に入って来られ、
そこに期待を認められます。
あなたを見たことがなくとも、
私たちがあなたを愛し、
あなたをまだ見なくとも、
私たちがあなたに信頼していることを
あなたをご存知です。

聖霊、内なる光よ、

あなたは試練の時も
幸いな日々を照らしてくださいます。
そして、光が消えたように見える時でも、
そこに留まってくださいます。

全く永遠である神よ、

あなたは私たち一人ひとりを
例外なく愛されます。
そして、あなたの絶えざる救しの中で、
私たちは心の平和を見出すのです。

憐れみのイエスよ、

あなたは私たちに伝えさせてくださいます。
私たちの心の信頼を通して、
希望の火を
私たちの周囲の人々に。

慰めの霊、聖霊よ、

福音に従順な私たちに、
あなたは託してくださいます、
希望の神秘を。
私たちがそれを知らない時でも、
それはそこにあり、
私たちの信頼に微笑みかけてくださいます。

憐れみの神よ、

聖霊に聴き従って、
私たちは住みたいのです、
あらゆる時に、
あなたにすべてを委ねる
あの信頼の中で。

私たちの平和、イエスよ、
全く小さな信仰であっても、
私たちはあなたの声に聴き従いたいのです。
「神に帰りなさい。
そうすれば、福音への信頼を与えよう。」と言
われる時。

聖霊よ、キリストの愛の息吹よ、
あなたはつねに臨在し、
私たちの魂の奥底に、
信仰の信頼を置かれます。

平和の神よ、
聖霊によって、
私たちが心の砂漠を
横断するよう導き、
そして赦しによって、
私たちの過ちを朝霧のように
消してくださいませ。

キリスト、イエスよ、
貧しい者たちのなかでも貧しい者として生まれ、
あなたは神の謙虚な方、
裁くためではなく、
神との交わりを開くために、
やって来られました。

すべての人間存在を愛される神よ、
私たち自身をあなたに委ねる時、
私たちの苦痛さえも聖霊によって
照らされていることを私たちは知っています。

私たちの信頼、イエスよ、
私たちは魂を挙げて、
あなたを愛したいのです。
私たちの命の賜物を、
さらに、そして、つねに、
新しくしてください。

聖霊よ、
私たち自身を忘れ、
あなたに委ねるために、
信頼と心の素朴さに

私たちを開いてください。

主は私たちを伴われる

過越の祭の夕べ、主はエマオの村への途上、二
人の弟子を伴われました。その時、彼らは側を歩
いておられる方に気付きませんでした。

私たちもまた、キリストが聖霊によってすぐ側
におられるのを意識しないで時を過ごします。

絶えず、主は私たちに伴われます。主は私たち
の魂を思いがけない光で照らされます。そして、
私たちのうちに何か闇が留まる時、とりわけ私た
ち一人一人の中に主に存在の神秘があることを見
いだすのです。

確信を保持するよう努めよう。どんな確信を持
つのか。キリストは一人一人に言われます。「私
はあなたを愛する。終わることのない愛によっ
て。私はあなたを棄てはしない。聖霊によって私
はつねにあなたと共にいる。」

クリスマス
平和の神よ、

クリスマスに私たちは見出します。

おとめマリアに続いて、福音の清らかな喜びの
一つは、心と生活の簡潔さに向かって前進するこ
とであることを。

持っているものが少なくとも、私たちは静思と
愛のなかであなたをお迎えしたいのです。

公現の日に
愛の神よ、
私たちの心の闇のなかに
あなたの存在は燃してくださいませ
内なる焰を。

公現の日に
私たちは知るのです。
この光の源は私たちが創るのではなく
私たちの心深くに住む聖霊であることを。

枝の主日

キリストであるイエスよ、

枝の主日の弟子のように、あなたとともに私た
ちの十字架を担う準備をするために、私たちは喜

びを必要とします。

そして、あなたは私たち一人一人に言われます。「恐れるな。常に、そして、新たに私に従う危険をとれ。」

聖木曜日

憐れみ豊かな神よ、
私たちの心と精神は
あなたを求める乾いた大地のようです。
そして、あなたは私たちの上に広げてくださいます
私たちを生かす
聖体秘蹟による平和を。

聖金曜日

聖霊よ、
私たちのうちにあるあなたの存在によって、この日に、神の憐れみを知り、神が愛のみを与えてくださることを理解するよう私たちに備えさせてください。

聖土曜日

全く永遠である神よ、
私たちの中ですべてが沈黙である時、私たちの心はあなたに語り、祈り、そして、あなたに私たちを委ねます。

復活節

キリストであるイエスよ、
あなたの弟子の幾人かに起こったように、私たちはあなたの復活の存在を理解するのに苦しむことがあるかもしれませんが、しかし、聖霊によってあなたは私たちを住まわせ、一人一人に語られます。

「私に従って来なさい。私はあなたのために命の道を拓いたのです。」

ペンテコステ

キリストであるイエスよ、
あなたは福音のなかで私たちを確信させてくださいます。
「私はあなたを一人で放っておくことを決してしない。

私はあなたたちに聖霊を送る。

聖霊は支え、慰めてくれるであろう。

日々、神との交わりを与えてくれるであろう。」

キリストの変容の祝日

聖霊よ、
あなたは私たちの弱さを御存知ですが
しかし、私たちの心を変えてくださいます
私たちの闇自体が内なる光となるほど。

万聖節

憐れみの神よ、
キリストの聖なる証人たちに次々と
使徒たちと聖母マリアから今日まで
あなたは私たちに呼びかけられます。
周りの人々に
平和と信頼と喜びをもたらすことを。

臨終

憐れみのキリストよ、
あなたは先に召された人たちや間もなく共に住む人たちとの交わりを備えてくださいます。彼らは既に目には見えないものを見ています。彼らに続いて、私たちがあなたの輝きの光を受ける備えを与えてくださいます。

誕生

優しさの神よ、
あなたは福音の前で私たちをへりくだった者にしてください。
全く素直な信頼を通して、私たちのうちに最上のものが造られることを、そして、子供でさえ、そこに至ることができるということを私たちは強く理解します。

バプテスマ

私たちを愛する神よ、
聖霊において洗礼を受け、
とこしえに私たちはキリストを受け入れます。
そして、あなたは私たち一人一人に言われます。
「あなたは私にとって唯一の者であり、あなたのうちに私の喜びを見い出す。」

〈追記〉

テゼ共同体の賛美の歌をうたう集会在、カルチャー・コンサート〈地中海世界の賛美と祈り〉〈ヨーロッパの心と華〉などの主題で、2006年～2007年、日本キリスト改革派板宿教会において、関西学院大学大学院生、加藤庸子さん、上田直宏君の指導、教会オルガニスト、三輪祐子さん、山本智子さん、市川百合子さん、市川頼子さん、市川友子さん、森川美穂子らの協力によって開催され、そのさい、本小論執筆者はテゼ共同体とその指導者、ブラザー・ロジェの『心の静思のなかの祈り』を紹介した。その祈りの試訳はその後、同教会の「月報」で数回にわたって掲載された。本小論はそれを修正、加筆したものである。

テゼ共同体とポール・ロワイヤル修道院

はじめに

2000年9月、テゼ共同体を訪れたとき、修道士たちの昼食会に招かれた。食後、共同体の習慣に従って、同じく招かれていた数名の人が順次、ロジェ修道院長に挨拶をした。私が挨拶すると、ロジェ師は《Port-Royal était le modèle de la Communauté de Taizé.》「ポール・ロワイヤル修道院はテゼ共同体のモデルでした。」と言われ、サン・シラン²⁾、パスカル³⁾、アンジェリック・アルノー⁴⁾、アニエス・アルノー⁵⁾など、ポール・ロワイヤルの人々の名を挙げられた。ご高齢であり、また、体調が余りよくないと伺っていたし、他に招待された人もいたので、さらに詳しく聴くのは遠慮したが、初期からテゼ宗教共同体に参加している旧知のエリック修道士⁶⁾に訊くと、「その通りだ」と言う。ロジェ師とパスカルや

ポール・ロワイヤルの人々の宗教思想には類似性があると以前から感じていたので、ロジェ師の著書のなかにパスカルやポール・ロワイヤルの記述を探したが、見つけることはできないでいた。翌2001年と2002年の9月、テゼ共同体を訪れ、昼食会に招かれた時にも、ロジェ師は「若い修道士たちはポール・ロワイヤルのことを知らないから話してほしい」と言われた。ロジェ師の「ポール・ロワイヤルはテゼ共同体のモデルです。」という言葉の重要さをあらためて強く感じさせられた。テゼ宗教共同体の創設期についての記録を、テゼに記録文書館や図書館があれば、そこで調べたいと願ったが、ほとんどないに等しいと、エリック修道士は言われた。一体、テゼ共同体とポール・ロワイヤル修道院を結びつけたものは、何であろうか。

1. テゼ共同体

1965年から1967年、初めてパリに留学したとき、「プロテスタンチズムの修道院」とも呼ばれていたテゼ共同体に青年、学生たちが集まっていることを聞いていたので、訪れたいと願いつつ、その機会が得られなかった。帰国後、山中良知先生⁷⁾にテゼのことを報告すると、「そういうところを君に見てきてほしかったんだ」と言われた。1973年、2度目の留学をした時は、すぐにテゼを訪れた。ペンテコステだったので、大勢の青年、学生、また、成人も集っていた。以後、幾度か滞在し、1978年、『クレセント Vol. 2 No. 2 DECEMBER 1978』に「テゼ 新しい創造力の鼓動が 世界の若者が集まってくる 出会いと和解の丘 宗教と芸術の総合」(関西学院出版)と題して寄稿した。その後、約30年経過したが、テゼ共同体の内外的変化、発展もあるし、また、変わらないものもある。

2) Abbé de Saint-Cyran, 本名 Du Vergier de Hauranne (1581-1643)

3) Blaise Pascal (1623-1662) cf. 森川甫著『パスカル「プロヴァンシアルの手紙」—ポール・ロワイヤル修道院とイエズス会』2000年

4) Angélique ARNAULD (1591-1661) ポール・ロワイヤル修道院院長

5) Agnès ARNAULD (1593-1671) ポール・ロワイヤル修道院院長

6) Fr. Eric, Eric de Saussure. cf. 『クレセント Vol. 2 No. 21978 DECEMBER』pp. 103-110. 「テゼ 新しい創造力の鼓動が 世界の若者が集まってくる 出会いと和解の丘 宗教と芸術の総合」2008年没。

7) 元関西学院大学社会学部長、1977年6月3日没。

寄稿文「テゼ」の中では、次のように記している。「確かに、今日は相対的な時代であって、絶対神への信仰が稀薄になっており、非キリスト教化の傾向を歩んでいることは否めない。ヨーロッパ各地で教会や修道院が廃止され、教会に出席する青年の数は減少している。しかしながら、キリスト教にとって危機の時代は今が初めてではない。たとえば、ルネッサンス期もそうであり、啓蒙時代にも危機があった。そして、キリスト教はそのような危機を克服してきたのである。自らのうちに克服する力をヨーロッパのキリスト教会は持っていたと言えるであろう。現代においても、その徴候がすでに見られると思う。その1つとして、テゼ共同体が挙げられるだろう。プロテスタント、カトリックを問わず、既成の教会から青年男女の姿がだんだんと減ってきたなかで、逆にテゼの丘には、2万、4万人と自発的に集って来た。しかも、テゼ共同体に集う若者たちは、パリなど大都市にたむろする若者たちと違って、真剣さと和やかさがその表情にある。このように青年たちを惹きつけているテゼ共同体とは一体、何なのであろうか。今、テゼ共同体の宗教生活と芸術活動について述べてみたい。」と述べて、「コミュニオーテの起源」「宗教生活」を示している。⁸⁾

「コミュニオーテの起源」では、次のように書いている。

テゼ共同体の修道院長、ロジェ・シュルツ師はスイス改革派教会の牧師であった。1940年に宗教共同体を創るためにテゼを訪れた。何故、テゼを選んだのであろうか。ロジェ・シュルツ師自身が次のように述べている。「祈りの生活をするためにその土地を探しに、クリュニーを訪れたとき、ある公証人がテゼの一軒家を教えてくれた。柵は閉じられていたが、戸口のそばに農民の老婆がいた。お昼頃だったので、どこか食事をするところはないか尋ねた。するとその老婆は『どうぞ私の家に来てください。』と答えた。食事の際、彼女は私に言った。『この家を買って、ここに留まってください。私たちは孤独で、さびしいのです。』私は他のところを選ぶこともできたであろう。しかし、私はこのテゼに決めた。何故ならば、『留

まってください』と言った老婆が貧しかったからである。貧しい者の声のなかに、神の声を聴き取ることが常に大切であるからである。」貧しい人々と共に、イエス・キリストから与えられた愛をもって共に生きる姿勢は、テゼ共同体の特徴となって今も変わらない。

ロジェ師がテゼにやって来たのは、第2次世界大戦が始まって間もない頃であった。当時、フランスは北半分がナチス・ドイツの占領下にあり、南半分はペタン元帥の親独政権によって統治されており、その境界線がテゼのすぐ北側にあった。それから約2年間、ここに住んだロジェ師は、祈りの生活をすると共に、抗独レジスタンス運動をする人々をかくまったり、被占領地域から脱出して来るユダヤ人など、迫害され、疲れ切った人々を受け入れ、スイスに送った。1942年、ついにゲシュタポの捜索を受けたが、幸い、師はスイスに行っていたので、難を免れた。以後、戦争の終わるまで2年間、ジュネーヴで3人の修道士と宗教的共同生活を始めた。やがて、大戦が終わり、テゼに帰り、宗教共同体の活動を始めた。まず最初に、ドイツ人捕虜収容所と接触し、やがてドイツ人兵捕虜たちもテゼ共同体を訪れ、さらに、かつてのレジスタントたちも加わり、敵対していた人たちが共に祈ることになった。現在、テゼの丘には大きな教会堂が立っているが、これは1962年にドイツのキリスト教徒たちによって建てられて、その名も「和解の教会 Eglise de Réconciliation」と呼ばれている。訪問者、参加者が多いときには、この大教会堂の前には大テントが張られていたが、現在は、たまねぎ型の屋根を持つビザンチン様式の建物が増設され、溢れる若者を受け入れている。交通のアクセスも、かつては、パリからだ急行列車でシャロン・シュル・ソヌか、マコンまで行き、国鉄バスに乗り換えて、すでに廃線となっていた旧テゼ駅で下車し、500メートルほど緩やかな坂道を登って行かねばならなかったが、今ではテゼ宗教共同体の「歓迎案内所」前に、バス停留所「Communauté テゼ共同体」が設けられている。また、かつては、パリから急行列車で4時間ほどかかったが、現在は、近くに新幹

8) 『クレセント Vol. 2 No. 21978 DECEMBER』 *Ibid.*

線が走り、在来線のマコン駅よりも近くに新幹線のマコン駅が設置されており、テゼの丘の東方に新幹線の列車が走るのが樹木の間から見られる。

宗教生活

1949年に7名の修道士が加わり、新しい段階を迎える。テゼ共同体では、次の3点を守って、キリストにあって1つとなり、神と人を愛することを誓いとしている。第1は、独身を守ることであり、第2は、自給・共同体主義である。修道士たちは各自それぞれ、職業を持って、共同体に必要な費用を得、他から全く援助を受けない。1970年代の中ごろ、修道士は約70名いたが、現在、約120名、その国籍は、フランス、ドイツ、スイス、イタリア、スペイン、アメリカ、インド、韓国など多数にわたっており、また、1970年代は大多数がプロテスタント出身で、カトリック出身は10名ほどであったが、現在は多くのカトリック教徒もおり、ギリシャ正教徒もいる。また、テゼ宗教共同体の祈りに参加するため、ユダヤ教徒やムスリム（イスラム教徒）も訪れている。

テゼ共同体の日課の中心は、朝昼晩3回の礼拝（office オフィス）である。修道士たちが鐘の音とともに教会堂に入場し、聖壇に向かって中央に横4人ずつ席を占めると、会衆はその周りに座る。テゼ共同体の作詞、作曲した賛美の歌をラテン語、フランス語、英語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、その他いろいろな言語で歌う。聖書も各国語で朗読される。祈りも各国語でなされる。「静思（silence シランス）のとき」は、各自の祈りと瞑想に当てられる。何千人、何万人もの人が出席していても、静かな沈黙が続く。ロジェ師が説教する時もあり、また、礼拝後、青年たちと対話をしたり、祝福し、祈るときもあった。ロジェ師の説教は、聖書を神の言葉として受け入れ、イエス・キリストの復活を事実として信じる正統的信仰に基づくものであり、また、礼拝のプログラムは一つ一つ伝統的なものであって、新奇なものではない。

青年たちは自発的に参加するが、青年たちを1週間、あるいは、週末4日間単位で、組織的に受け入れるようになっている。成人についても同様である。食事、宿泊、集会などの世話も青年たち

の自発的な奉仕を基本としているが、設備が整備されてくるのと同様、受け入れも、組織的、機能的に行われるようになってきた。

この丘では、国籍、教派、宗教、階級、年齢を超えて、人との出会い、また、イエス・キリストとの出会いが体験され、対話が行われる。1974年の夏から行われているテゼ宗教共同体の「青年宗教会議」は、その後、ローマ、パリ、ブタベトなど大都市で開催されてきた。テゼ共同体の集会は、運動ではなく、出会いだといわれる。つまり、何らかの目標に向かって、一団となって行動を起こすのではなく、ここでイエス・キリストの愛に生きる勇気と希望が与えられて、それぞれ、家庭に、学校に、企業に、工場に、教会に戻って、新たな希望を持って生きることが勧められている。多くの青年はこのテゼに生きた出会いがあり、生きた教えがあると感じているようである。

初期と異なり、テゼ共同体は今日、エキュメニズムの性格をもっているが、キリスト教の源泉において、聖書を学び、祈りをなし、また、そこから立ち上がって、イエスの愛を持って現代を生きるという姿勢は全く変わっていない。

芸術活動

プロテスタントの新しい芸術運動の芽生えとも言われてきたテゼ共同体の活動は目覚ましい。シャロン・シュル・ソーヌに設立された音楽アカデミーにパリから指導に来ていたオリヴィエ・メシアン（Olivier Messiaen）の協力も得て、神を賛美する新しい歌を作詞、作曲してきた。テゼ共同体の賛美の歌は今日、2百数十編に及び、世界各地で歌われ、日本でも歌われるようになってきた。

陶芸の活動も活発で、フランソワ・ダニエル修道士は陶芸を通して人間と自然を省察し、創造主なる、神の栄光を讃えようとしている。絵画では、エリック修道士やマルク修道士がいる。マルク修道士は1970年代後半、日本に滞在したが、その後、韓国で活躍を続けている。

テゼ共同体の初期から、芸術活動に従事してきたエリック修道士に注目してみよう。テゼ共同体での最初の25年間は、礼拝のための芸術、つまり、礼拝の場を装飾する制作をしてきたが、やがて、そのような傾向との断絶が起り、礼拝の場

の外的な装飾やキリスト教芸術の伝統的なテーマではなく、信仰によって触発された心の動きや神の創造の業を賛美するものへと変わってきた。

エリック・ド・ソシュールのすべての作品に共通して表現されている心温まる優しさは、ロジェ・シュルツ修道院長の説かれる、復活の主、イエス・キリストによる和解から発しているものであろう。ロジェ院長が筆者にくださった次の言葉は、テゼ共同体の精神の根源をよく表現していると思う。「愛なるキリストは、平和の喜びと復活の希望を、あなたに与えられる。あなたの修道士、ロジェ」⁹⁾

2. ポール・ロワイヤル修道院

ポール・ロワイヤル修道院は13世紀初頭、シュヴルーズの溪谷に創立された元シトー会の女子修道院であった。トレントの公会議 Concile de Trente (1545-1563) ののち、教会刷新の機運が高まり、17世紀のフランスが「宗教の世紀」と呼ばれた状況のなかで、修道院長、アンジェリック・アルノー、アニェス・アルノーが修道院改革に取り組み、やがて、サン・シランがジャンセニウスの『アウグスチヌス』の思想を強力に伝え、指導した。聖書の研究が熱心になされ、メートル・ド・サシは聖書をフランス語に翻訳し、パスカルも『要約イエスの生涯』¹⁰⁾を書いている。劇作家、ラシーヌや寓話詩人、ファーブルも学ぶことになる「小さな学校」Petite Ecole を設立し、当代の教育、文化に強い影響を与えている。

サン・シランによって指導され、ジャンセニウスの『アウグスチヌス』の思想を信奉したポール・ロワイヤル修道院は、国王ルイ14世とも結びつく多数派のイエズス会と対立する。その頂点は、恩寵問題と道徳問題に関してなされた『プロヴァンシアル』論争である。パスカルはアントワヌ・アルノー、ピエール・ニコルらの協力を得て、18通の『プロヴァンシアルの手紙』を次々と秘密出版し、民衆の間で大喝采を得た。

『プロヴァンシアルの手紙』において表されたジャンセニストとジェズイットの姿は、次のようになる。ジャンセニストは、その教義においても、その道徳生活においても統一性があるのに対し、ジェズイットは不明瞭で誇張がある。ジャンセニストは読者を信用して、真実を読者に訴えているが、ジェズイットは読者を信用せず、問題を専門の聖職者のみにとどめようとする。ジャンセニストは伝統的権威、永遠の真理を求めるが、ジェズイットは自ら新しい権威になろうとし、真理は変わりうるものとしている。ジャンセニストは聖書の道徳律法を絶対的な道徳とするが、ジェズイットにとっては、倫理は人間を取り巻く状況によって変わりうるものである。恩寵問題では、ジャンセニストは神の恩寵を絶対的とし、ジェズイットは人間の自由意志を強調する。ジェズイットはこの『プロヴァンシアルの手紙』によって大打撃を受け、後年、議会によって、フランス国内では、廃止の宣告を受ける¹¹⁾。それより前に、ポール・ロワイヤル修道院は国王の権力によって修道女はポール・ロワイヤル修道院から追放され、ポール・ロワイヤル・デ・シャンは小礼拝堂、鳩小屋を除いてほとんど大部分の建物は破壊されてしまった。フランスのイエズス会はその後、復活したが、ポール・ロワイヤル修道院はその精神を継承する人々が熱心かつ真摯にその活動を続けている。

このポール・ロワイヤル修道院とテゼ宗教共同体に関してエリック修道士から L. Frédéric Jaccard ジャッカール教授の講義について、重要な証言を得ることになる。

3. ジャッカール教授——エリック修道士の証言——

ロジェ・シュルツはジュネーヴ大学において、ジャッカール教授のポール・ロワイヤル修道院に関する熱烈な、豊かな講義を聴き、その影響を受けエリック修道士¹²⁾も聴講し、また、ジャッカー

9) 『クレセント Vol. 2 No. 21978 DECEMBER』 *Op. cit.*, p. 110.

10) 拙訳。『メナール版パスカル全集』第二巻 白水社 1994年 所収

11) Cf. 拙著『プロヴァンシアルの手紙』第2部

12) Frère Eric 2008年没。

ル教授は牧師であったエリック修道士の父の家を訪れたこともあるという。

ジャックール教授の著書は多くはないが、ポール・ロワイヤル修道院について、次の著書がある。

SAINT-CYRAN, PRÉCURSEUR DE PASCAL, 1945
BLAISE PASCAL, DÉFENSEUR DE LA VÉRITÉ,
ÉDITION H. MESSEILLER, NEUCHÂTEL, 1946.

前者、『サン・シラン』において、ジャックール教授は次のように述べている。

「17世紀カトリックは数多くの泉が湧いた庭である。そこではすべてが開花した。ボシュエのような良識あるキリスト者、サン・ヴァンサン・ド・ポールのような人道主義者、ピエール・ニコルのような宗教的合理主義者、サン・フランソワ・ド・サル、ジャン・ド・ベリエールの如き神秘家、フェヌロン、ギヨン夫人のような静寂主義者、ギヨレのような高揚熱狂派、デマレ・ド・サン・ソルランのような神に招命された人」がいる。

通称、サン・シランと呼ばれるジャン・デュ・ヴェルジェ・デュ・オーランヌを上記のカテゴリに分類することは非常に難しい。「豊かな、完璧な、多彩な人格の持主、サン・シランは上記のカテゴリのそれぞれに類縁があるが、しかし、そのどれにも属さない。彼は、とりわけ、「キリスト教霊性家」である。彼の宗教、生きる姿勢、敬虔さは本質的に霊的であり、福音書、使徒書簡、古代教父に示されている歴史的人格、イエス・キリストから、常に、絶え間なく発している。サン・シランには、神秘的なものがあり、靈感された預言的なものがある。彼の声は彼を超えたところから来て、彼はそれを受け取り、語る。イエス・キリストの神秘を生き生きと理解し、それを周囲の人々に直ちに伝え、感化する。サン・シランは魂の偉大な医者である。」¹³⁾と。

後者『ブレーズ・パスカル』において、ジャッ

カール教授は次のように述べる。

「パスカルはフランスの文学者であるが、さらに、世界の文学者でもある。この思想家に対する関心、好奇心は倦みつかれるどころか、事あるごとに、増え続けている。毎週新しい書物や研究論文が私たちに届けられている。それゆえ、全体としてのパスカルを研究するのは、余り意味がないのではないか。この書では、ひとつの断面、つまり、ポール・ロワイヤル修道院の歴史に関する限り、パスカルを取り扱う。意図して、パスカルの生まれとか、時代の潮流との関係とか、哲学の特質とか、作家としての質とかは、脇に置く。そのようなことに触れるのは、サン・シランの精神的後継者、ポール・ロワイヤリスト、パスカルを理解するための限りにおいてである。」¹⁴⁾

結 び

ジャックール教授の説き示す、魂の指導者としてのサン・シラン、神への畏敬の念を教えるパスカルが若きロジェ・シュルツ師を感動させ、イエスの愛に生きる共同体の創設に導いたのであろうか。

「1986年10月5日、教皇ヨハネ・パウロ2世はテゼ宗教共同体を訪れ、青年たちに『泉の脇を通っていくように、人はテゼを通り過ぎていく。旅人はここで立ち止まり、のどの渇きを潤し、その旅を続ける。…』と述べた後、『私は教皇ヨハネ23世がある日、フレール・ロジェに告げたこの単純素朴な言葉で、皆さんへの私の愛情と信頼を表したい。『ああ、テゼにはあの小さな春の訪れがある。』¹⁵⁾ここには20世紀後半に生き生きとした祈りの泉がテゼに溢れ出たことが言い表せられているのではないだろうか。「和解の教会、和解の修道会、和解のテゼ。…ヨーロッパの、いや、ヨーロッパに最初に入り、全世界のものとなったキリスト教を、今日、語ろうとする者で、もしテゼを知らないなら、『もぐりでしかない』とすら言われるテゼ。』¹⁶⁾という犬養道子氏の指摘にも強

13) L. FRÉDÉRIC JACCARD, *SAINT-CYRAN, l'éducateur des âmes*. p. 1.

14) L. FRÉDÉRIC JACCARD, *BLAISE PASCAL, DÉFENSEUR DE LA VÉRITÉ*, pp. 9-10.

15) Fr. Roger, *La source de Taizé*, pp. 109-110.

16) 犬養道子著『ヨーロッパの心』1991年 p. 242.

い共感を覚える。ポール・ロワイヤル修道院がテゼ共同体のモデルであったとすると、ポール・ロワイヤル修道院の精神を継承し、その活動を総帥し、かつてのパリのポール・ロワイヤル修道院の礼拝堂で、今日も毎週ミサをまもっておられるジャン・メナール教授は、《Port-Royal était le modèle de la Communauté de Taizé.》というロジェ師の言葉を私が報告した時に述べられた、「ポール・ロワイヤル修道院の精神の現代における開花である。」という言葉は、まさに適切な評言であると思われる。

参考文献

Roger SCHULZ (Fr.)

- *Vivre aujourd'hui de Dieu*, 1958
- *L'unité, espérance de vie*, 1963
- *Dynamique du provisoire*, 1965
- *Unanimité dans le pluralisme*, 1966
- *Violence des pacifiques*, 1968
- *Son amour est en feu*, 1988
- *Ce feu ne s'éteint jamais*, 1990
- *En toi la paix au Cœur*, 1999
- *La source de Taizé*, 2001
- *Dieu ne peut qu'aimer*, 2001
- *Pressens-tu un bonheur?* 2005
- *Prier dans le silence du Cœur. Cent prières* 1995
etc. Presse de Taizé

Chantal Joly,

- *Potrait de Taizé*, 2000

L. FRÉDÉRIC JACCARD

- *SAINT-CYRAN, PRÉCURSEUR DE PASCAL*, 1945
- *BLAISE PASCAL, DÉFENSEUR DE LA VÉRITÉ*,
ÉDITION H. MESSEILLER, NEUCHÂTEL, 1946.
- *SAINT-CYRAN, l'éducateur des âmes*.

Jean ORCIBAL,

- *Jean Duvergier de Hauranne, ABBÉ DE SAINT-CYRAN ET SON TEMPS*, 1947

LOUIS COGNET,

- *LA RÉFORME DE PORT-ROYAL*, 1950.

犬養道子

- 『ヨーロッパの心』1991年 岩波新書

森川 甫

- 『バスカル「プロヴァンシアルの手紙」—ポール・ロワイヤル修道院とイエズス会』2000年、関西学院大学出版会
- 『クレセント Vol. 2 No. 21978 DECEMBER』「テゼ 新しい創造力の鼓動が 世界の若者が集まってくる 出会いと和解の丘 宗教と芸術の総合」1978年（関西学院）

Brother Roger, *Prier dans le silence du cœur*.

— Taizé Community and Port-Royal —

ABSTRACT

In the summer of 2002, when I visited the Taizé Community, I was invited to lunch by Brother Roger, and after lunch Brother Roger revealed to me the significance of Port-Royal, and said, “At the beginning, Port-Royal was the model of the Community.” He enumerated intimately the names of Mother Angélique Arnauld, Mother Agnes Arnauld, Saint-Cyran and Blaise Pascal. Then, following summer, Brother Roger asked me to talk about Port-Royal for the brothers after lunch, saying that the young brothers did not know very much about Port-Royal. And the next summer also he asked again for me to speak about Port-Royal. As for many years I had felt a similar atmosphere between Taizé and Port-Royal, I had read all his works, but I could not find any description on Port-Royal. Brother Eric, who followed Brother Roger since the early time of the Community, assisted at the conferences on Blaise Pascal, Saint Cyran and Port-Royal, given by Professor Frederic Jaccard at Genève University with Brother Roger, who listened eagerly to the conferences and influenced very deeply. In one of his two last books *Pressent-tu un bonheur?* printed in November 2005, I finally found a description of Port-Royal and I think that the other book, *Prier dans le silence du cœur*, printed in July 2006 shows the similarities in expression and religious thought between Pascal and Brother Roger.

Key Words: Brother Roger, Port-Royal, pray.